

# 江戸はこうして造られた

## 江戸の町の水利機能（上水道）



江戸には神田上水、玉川上水および本所（亀有）上水の3系統の上水道があったが、本所上水は享保7年（1722）、玉川上水の分水である三田・青山・千川の3上水とともに廃止され、以後、江戸の上水道は神田・玉川両上水となった。玉川上水は江戸全域に給水可能で、江戸城、大名屋敷、および武家屋敷を主体に配水し、また武蔵野台地の開発用水ともなっていた。一方、神田上水は武家屋敷と町屋を主体に配水していた。江戸の上水道は近代水道と異なり、人びとの生活用水とともに防火用水、江戸城濠・大名屋敷泉水・下水に水を流すなどの多用途施設であった。



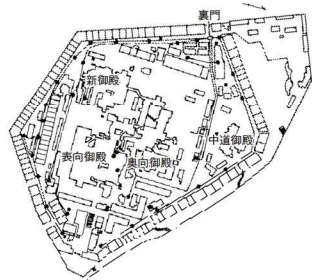
江戸全図「貞享上水図」（『東京市史稿 上水篇』附図 東京都公文書館から転載）

貞享年間（1684～1687）頃の上水網の全体図。当時、江戸城本丸・二の丸、西の丸へも配水していたが、上水種は描かれていない。上水種の接続は不正確な部分があるのが惜しまれる。



元治元年（1864）仮御殿として造営された西の丸の表・中奥部分の絵図で、図中に上水種と6カ所の上水井戸および泉水がある。鑄種は銅製の円管。

「江戸城精細間取一覽図」（都立中央図書館蔵）



彦根藩井伊家上屋敷の上水

「1801(享和元)年改上屋敷絵図」（彦根城博物館蔵）をもとに作製

中央に表御殿、奥向御殿および新御殿があり、屋敷周りは家臣の長屋。「内工門繫種筋絵図」とほぼ対応していることがわかる。19,685坪。元禄9年（1696）の居住者数約2,000人。

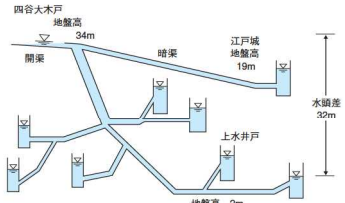


「内工門繫種筋絵図」

（彦根城博物館蔵）

霞ヶ関にあった彦根藩井伊家上屋敷内の上水種だけの絵図。屋敷裏門を入ってすぐの矩形の枡から5系統の上水種が分岐する。

このシステムだと、上水井戸天端から水が吹き出すことになるが、実際には上水種の途中とか末端から水を流す吐種が設けられ、吐種を出た水が濠・下水・泉水等に流れていた。



江戸内の玉川上水の構造模式図

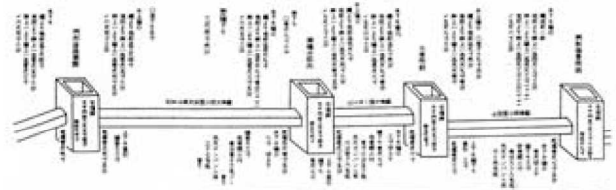


「上水記」にみる玉川上水の配水先と吐種位置および吐種放流先(表)

「上水記」巻五（東京都水道局蔵、寛政3年（1791））をもとに作製

吐種①-⑧の位置	放流先	吐種⑩-⑬の位置	放流先
① 地形一面石緑樹	下水	⑩ 地形一面石緑樹	下水
② 地形一面樹	下水	⑪ 埋樹	掘
③ 下水跨木種	赤坂溜池	⑫ 埋樹	掘
④ 地形一面石緑樹	下水	⑬ 地形一面石緑樹	掘
⑤ 地形一面石緑樹	掘	⑭ 地形一面石緑樹	下水
⑥ 地形一面石緑樹	掘	⑮ 埋樹	掘
⑦ 地形一面石緑樹	掘	⑯ 井（評定所内）	掘
⑧ 地形一面石緑樹	下水	⑰ 井（評定所内）	掘
		⑱ 埋樹	掘

この絵図に描かれているのは「御普請場」、「普請場」の上水種で、前者は幕府管理、後者は武士・町人のつくる上水組合管理である。これらの幹線上水種から大名屋敷等への自分引取種、組合種へ分岐する。吐種放流先の⑬は吐種から出る上水を水船に受け、水利の悪い本所・深川あたりに水を売り歩いた。



「千川上水留」（国立国会図書館蔵）から作製

慶応元年（1865）、本丸掛上掛半蔵門内外種枡を修復したとき、水盛り（水準測量）をした図。枡間の種勾配は一定でないが急勾配、枡底は泥溜となっている。

鉄砲町は神田上水の給水区域。街路中の二重線が上水種、□の印は枡、井桁の印が上水井戸。鉄砲町では、町屋敷地内の上水井戸、街路上の上水井戸に給水している。図の上部に鏡の手に曲がっている水路は「鉄砲町大下水」。

「鉄砲町」法券図（中央区京橋図書館蔵）

